教授の呟き

第19回

舶来至上主義からの卒業

東京海洋大学教授　苦瀬博仁

ブランドブームの解釈

先日乗り合わせたタクシーの運転手は、経営していたハンドバッグの製造卸会社をたたんで転職したとのこと。高級品は欧米のブランド品に押され、低級品は中国からやってくる。そこで中級品を狙うことになるが、高級品と低級品の二極化の勢いが強いため、将来を見切ったそうである。

確かに、わが国のブランドブームはとどまるところを知らない。ヨーロッパのあるブランドは、全世界の3分の1以上を日本で売り上げているという。海外旅行で買い求める人を加えれば、日本人の購入比率はさらに上がるだろう。東京の銀座や原宿には、欧米高級ブランド店の進出が相次いでいる。不景気とは思えない光景である。

この現象を友人の経済学者は、「戦後ひもじい思いをした50歳代後半の父親は、たとえリストラされても昔よりはマシと考えて我慢する。その分パラサイト・シングル（親と同居する単身者）が、所帯費用の心配をせずにブランドを買いあさっている」と解説する。マークス寿子は、「自信のない女が、ブランド物を持ち歩く」として、個性化時代といわれながら、同じようなブランド品を持ち同じような化粧をして、個性を無くしていると記述している。[1]

しかし、他人ばかりを非難することはできない。わが身を振り返れば、「見かけ倒し」と見破られてしまうのに、「馬子にも衣装」を期待してブランド品にあこがれる自分もいる。

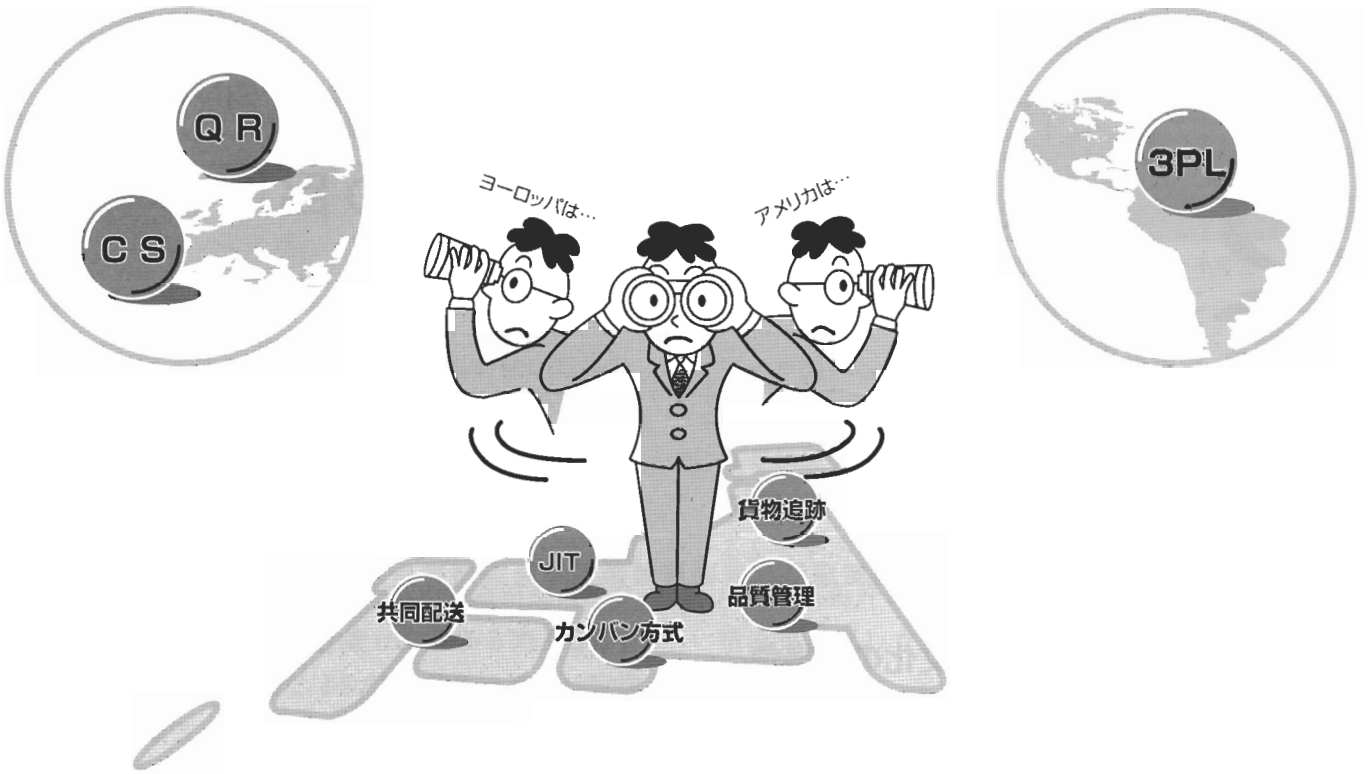
アジアからの指摘

アジア各国の物流管理者向けの集団研修が、国際協力の一環として毎年2月に日本で実施されている。実は昨年の研修終了時に「日本のロジスティクスのことを知りたくて来たが、講義内容には欧米諸国の事例が多かった」と指摘された。

われわれ以上の英語の使い手である彼らにしてみれば、英語の文献には慣れ親しんでいて欧米の事情にも明るい。「せっかく日本に来た以上、ＪＩＴやカンバン方式など、日本の高度な物流管理の実態とノウハウを知りたい」ということなのだろう。そこで今年は、日本の話に限るように努めた。

輸入学問と舶来品崇拝

学問や技術が発展途上のときには、先進国からの輸入は不可欠である。わが国でも、「蘭学事始」の時代から輸入学問の期間が長く、先進技術も高級品も輸入せざるを得なかった。この影響なのか、ついつい舶来モノに目が向いてしまうようだ。しかし、わが国のロジスティクス技術が、世界の中でそれほど見劣りするとは思えない。蓄積されたノウハウもあり、それなりの自信を持ってよいはずである。



少なくとも研修に来たアジア各国の物流管理者たちにしてみれば、欧米諸国の良さもさることながら、アジアにあって文化的にも近い日本は、立派なロジスティクス先進国なのである。

もうそろそろ輸入学問偏重や舶来品崇拝から、卒業してもよいような気がする。

和洋折衷の技術考案を

単純に「ブランド物だから良し」とするならば、そこにはホンモノを見抜こうとする姿勢が見いだせない。確実に数多く存在する高品質の国産品にも、目を注ぐべきだろう。

これと同じように、ロジスティクスでも諸外国の事例をうのみにしたり、やみくもに追従する時代は過ぎている。各国の生活習慣や消費者行動など、文化的な背景や経済的な状況に大きく影響されるロジスティクスだからこそ、国や地域に合わせたロジスティクスがあるはずである。

それゆえ、諸外国の良さを吸収しながらも、わが国の状況と履歴にふさわしいスタイルを追及しつつ、ロジスティクス技術をより高めていくことが重要だと思うのである。

(1) マークス寿子：「自信のない女がブランド物を持ち歩く」、草思社、2002
(2) 櫻木邦裕：「それでもブランド品を買いますか？」、彩流社、2004
(3) 山田敦郎：「ブランド・チャレンジ」、中央公論新社、2004
(4) 森田稔：「リアリティでは孵化しつつあるのではないか、日本型ロジスティクス・ビジネスモデルを見つけ出そう―研究の方向として―」、日本物流学会誌第12号、2004

Profile
東京海洋大学　海洋工学部
流通情報工学科　教授
苦瀬博仁

（くせ　ひろひと）1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。副学部長を経て、04年4月より評議員。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授（兼任）。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」（税務経理協会）、「都市交通―都市交通計画・都市物流計画」（丸善）、「マニラ・エンジョイ・トラブル」（論創社）、「明日の都市交通政策」（成文堂）